
日本はきもの博物館収蔵資料紹介

～19世紀末期から20世紀初頭の靴～

日本はきもの博物館学芸員（非常勤） 市 田 京 子

はじめに

ここでは、日本はきもの博物館（広島県福山市）に所蔵されている欧米のシュー・ファッションの歴史を伝える資料441点を順次紹介させていただいており、今回は、その資料のうち、19世紀末期から20世紀初頭の靴を取り上げる。

なお、掲載する写真は全て日本はきもの博物館所蔵である。

1. 時代と靴の特徴

19世紀末期から20世紀初頭という時代は、いわゆる世紀末、ベルエポックなどと表現される、ヨーロッパが経済的な繁栄のもとで奢侈と享楽を競った時期である。汽車による旅行、自転車や自動車の登場、電気の利用など、"近代的な生活"の基盤がととのって、パリ万博、近代オリンピック開催など華やかな催しも記録されている。

そうした時代にマッチするように、靴は機能的に完成したものになってくる。踵部を支えるカウンター、土踏まず部を支えるシャンクがしっかりしたものになり、側面から見ると、きれいな形のカーブを呈してくる（写真1）。底革も左右の足にしっかりと合わせた形になっており、あまり高くないヒールと合わせて安定感もある。

この時代、女性のドレスはまだ靴を覆う長さであり、理想のウエスト45センチというコルセットの締め付けもあったが、それ

でも活動的であろうとする欲求も生まれており、靴もそうした欲求に応じて履き分けられるようになっていく。散歩やスポーツ、旅行に履く「昼の靴」、パーティや観劇などに履く「夜の靴」が生まれたといえる。この流れにしたがい、素材も、これまでのシルクなどの布地だけでなく、革が多く用いられるようになっていく。

博物館では所蔵していないが、この時代、旅行用に靴専用のトランクも用いられており、靴へのこだわりがうかがえる。

2. 19世紀末期から20世紀初頭の浅靴

これまでの伝統を引き継いだのは「夜の靴」であり、シルク地が多く用いられたが革の使用もみられる。

写真1はアイボリー地にグレー系の花柄を織り出したシルク・ブローードで、この時期のブローードはこのような細かい柄が多くなる。飾りとしてのバックルも多くみ



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

られ、ダイヤモンドカットのガラスビーズで縁取られている。

1900~10年頃、イギリス。長23.3×幅6.9×全高10.6cm、ヒール高5.3cm。

写真2はアイボリーのシルク・サテン製で、フロントに同じ素材の小さなリボン飾りが付く。半月形のカウンターは踵部中央で上端近くに達し土踏まず部に下りており、薄い甲材の表からも分かる。また、やや反りあがった爪先部も芯を入れて形作られており、これも新しい傾向である。甲の裏打ちは全体に白の小山羊革が用いられている。

ラベルは内底革に金色の印判で記され、これも新たな形である。HELLSTERN & SONS.23 PLACE VENDOME.PARIS。

1905~10年。長24.5×幅6.6×全高9.8cm、ヒール高4.2cm。

写真3は白地に銀糸で雲のモチーフを織り出したブロードで、光沢のある銀色地を細かなビーズで囲んだ飾りバックルが付

く。やや丸みのある爪先、ストレートな感じのヒールは次の時代の要素に近い。内底は白いシルク地である。

1910年頃、イギリス。長21.7×幅6.6×全高13.1cm、ヒール高7.7cm。

写真4はやはりアイボリーのシルク・サテン製で、踵部の長い立ち上がりの特徴がある。甲部から周囲に小さな穴があり、そこにリボンテープを通して足首に巻いて履いた。このタイプの靴は、当時中南米から伝わって流行したタンゴにちなんで「タンゴ・シューズ」と呼ばれたという。甲中央にはメタル・ビーズとスパンゲルの刺繍が施されている。

ラベル：Hellstern & Sons, Brevetes Paris。

1914年頃。長25.2×幅6.7×全高16.0cm、ヒール高4.7cm。

写真5は光沢のある黒小山羊革製で、甲部にはメタル・ビーズとオニキスの刺繍とリボン形の飾りが付く。



写真6

ラベル（写真6）は金色印判で、PETER YAPP SLOANE STREET LONDON BY APPOINTMENT TO H.M. THE QUEEN と、英国王室御用達。

1900年頃。長24.1×幅6.5×全高10.3cm、ヒール高5.1cm。

革の使用はスポーティなデザインをもたらしたともいえる。写真7はデザインとしては古典的な、大きな舌革が甲を覆うクロムウェル・スタイルといわれるものである。山形の舌革の裏打ちはブルーのシルク・サテンで、履き口には毛皮（ラビットか）の縁取り、甲の裏打ちと内底はボアのような生地で、お洒落と防寒を備えている。この時期、リボン結びはインドア用といい、外出用ではバックル留めになるそう。

1900年頃、アメリカか。長25.1×幅6.9×全高10.1cm、ヒール高3.7cm。

女性用にもオックスフォード・タイプの靴が出ている。写真8は柔らかいイエロー・キッドのもので、6孔並んだハト目金具は銅製のようなものである。編み上げリボンは幅1.5センチのレモンイエローのシルクだったが僅かに残るだけだったため、補修したものである。

1890年代か、アメリカ。長24.9×幅6.4×全高9.4cm、ヒール高4.0cm。

写真9は上質のブラウン・レザーのしっかりした作りの靴で、甲の切り替え部とフロントにミシン・ステッチがみられる。他にも同じような靴を収蔵しているが、いずれも作りがいいことがフォルムの美しさを生んでいると思わせられるものである。

ラベル：MADE IN VIENNA FOR AFFLECK & BROWN MANCHESTER。



写真7



写真8



写真9

1900～5年、長24.5×幅7.3×全高11.5cm、ヒール高5.3cm。

3. 19世紀末期から20世紀初頭のブーツ

この時期のブーツは、いわゆるロングブーツ、膝下までのものが中心となる。編み上げやボタン留めがほとんどで、女性用ではサイドゴアはみられなくなる。

写真10はライトブラウンのカーフのブー



写真10



写真12



写真13



写真11

ツで、編み上げのハト目金具は裏だけに付けてある。ヒールは積み革で、その部分の内底にはフェルトが敷かれている。

この時期の典型的なスタイルといえるが、ややスポーティな印象もある。同じような黒いシルク・サテンのブーツに「仕事を持った女性のものであろう」というコメントのあるものがあり、特にアメリカでは活動の範囲が広がっていたことが推測される。

ラベル：Martha Washington MILWAUKEE Mayer CUSTOM MADE。

1910年頃。長26.2×幅7.6×全高25.6cm、ヒール高4.6cm。

写真11は白いカーフの編み上げブーツで、同じようなタイプに白い帆布のブーツもあり、夏用に用いられたという。

ラベル：Lord & Taylor NEW YORK

1900年頃。長24.6×幅7.2×全高25.8cm、ヒール高6.7cm。

ブーツにもドレスリーなものは多く、写真12は黒革のアプリケをした赤い革と植物模様のプロケードを合わせたブーツで、細めのルイ・ヒールとともに、優雅な豪華さがたどよう。

1890年代末期か、スウェーデン。長23.4×幅6.5×全高39.7cm、ヒール高9.0cm。

写真13はきれいなグリーンシルク・サテンを使ったボタン留めブーツである。白いボタンは12個あり、靴はミシン縫いであるが、ボタンホールは手縫いとなっている。

ラベル：Edward Hayes 8 WEST 28th ST. NEW YORK。

1900～5年。長21.0×幅6.6×全高27.5cm、ヒール高8.9cm。

おわりに

18世紀からの変遷にそって紹介してきたが、20世紀になるこの時期になって、靴はやっと機能性をもって完成したのである。歩くことを託して履き分けられるようになる。

まだ履き易さを考慮するより、求められたのは美しさであったことがうかがえるが、それは、靴にとっての永遠のテーマかもしれないとも思える。